

伝えたい

まちの遺産

万葉の道が通る山中峠

古くから北陸と奈良・京都の都、越前と若狭を結ぶ北陸道の峠。平安時代の天長七年（八三〇）から開かれた木ノ芽峠、織田信長に仕えた北ノ庄城主・柴田勝家が改修した栃ノ木峠、さらに古く奈良時代に開かれた山中峠（海拔三八九メートル）があります。



敦賀から山越えしたり、小船で杉津や五幡に辿り着いた旅人は、元比田（敦賀市）辺りから山中峠を越えて今庄に達しました。

可敵流廻の道行かむ日は
五幡の坂に袖振れわれをし思はば（万葉集18巻）

歌意―あなたが鹿藿の辺りの道を帰って行かれる日には、五幡の坂で袖を振ってください。

後に残る私を思ってくださいならば。
奈良時代初めの天平十八年（七四六）、大伴家持は、二十九歳で越中守となり伏木（現高岡市）に着任しましたが、その二年後、奈良の都からの



▲山中峠の南越前町と敦賀市の尾根境

使者田辺福麻呂が訪れ帰郷する際、贈った歌です。「可敵流廻」は鹿藿川（日野川支流）流域の地。「五幡の坂」は山中峠を指しているというのが定説で、この歌によってわかるように、峠は家持が通った以前から開かれていたのです。南越前町を通った最古の北陸道と言ってよく、万葉集に歌われたので「万葉の道」とも呼ばれています。

山中峠も今のままで亡失されてしまうと危機感を持った有志が集まり、峠を保存しようとして平成九年「万葉の道辺を探る会」を立ち上げ整備にとりかかりました。生い茂る雑草の刈払い、倒木や杉の伐採除去、古道をふさぐ孟宗竹の群落との戦いなど、一年目は二度挑戦しようやく峠に達しました。

平成十八年豪雪で、再び倒木により古道が塞がれましたが、今年六月第一回目の整備を実施、ようやく復旧しました。今後とも「万葉の道」を守るため活動を続けていきます。（町文化財保護委員・山本勝士）

伝えたい

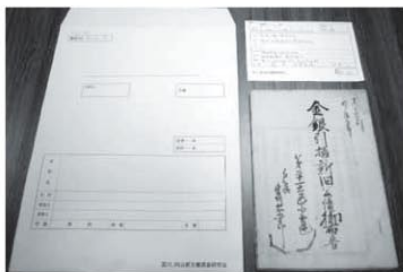
まちの遺産

宮川・向山家文書

南越前町の河野地区は北前船主右近家があった地域として、全国的に知られていることは、皆さんもご存知でしょう。しかしこの地域には右近家だけでなく、もうひとつ大谷区に重要な古文書が残されています。それが宮川・向山家文書です。

両家は江戸時代には庄屋さんを、また明治時代以降は地域行政の中心を担う存在でした。

両家に残された古文書の点数は、およそ一万七千点余（平成十九年九月現在）で、かなりの量です。この古文書の中には、古くは戦国時代の大変貴重な古文書もあります。しかし多くが江戸時代後期（十八世紀後半）から明治・大正時代にかけてのものでした。



宮川・向山家がいった旧河野村大谷区は、江戸時代、大谷村ではなく、「大谷浦」と呼ばれていました。現在日本各地に、江戸時代の「村」の古文書は多く残され、「村」に関する研究は大変に進んでいます。しかし「浦」である漁村などの海沿い地域の研究は、「浦」古文書が残されている事例が少ないため、今後の研究が期待される。



▲流通史の専門家による文書調査の様子

るテーマです。その点で宮川・向山家文書は大変貴重です。

ここで宮川・向山家文書の特徴をひとつご紹介しましょう。江戸時代もこの地域は海沿いにあり、平地が少なくないため、水田や畑も限られていました。そこで宮川・向山家では、油の実をはじめとした現金収入が得やすい作物を栽培し、船を使って敦賀へ直接販売して多くの収入を得ていたことを示す古文書が多く残されています。現在のように道路網が発達していない江戸時代、このような地域は陸の孤島のようなイメージがありますが、海に面している地形を逆に利用し、たくましく生きる江戸時代の人々の姿が、宮川・向山家文書から読み取れます。

（小林 風・専修大学大学院社会知性開発研究センター／歴史学研究センター任期制助手）

伝えたい

まちの遺産

上野古典立華

立華は、仏前に花を手向け
る供花に起源をもち、室町時
代、京都の六角堂池坊の僧侶
により確立されました。当初
は朝廷、寺院、武家などの間
で盛んに生けられていました。



その後、立華の様式をより簡略化した生花が生まれます。江戸時代中頃には庶民のたしなみへと変化し、生花を中心に広く流行し、時代とともに達人・名手が現れ、本流である池坊から枝分かれして多くの流派が誕生しました。

池坊立華の様式においても、「古典立華」に対して「現代立華」が、生花・抛入花などは「正風体」に加えて「新風体」・「自由花」などに分けられ、現代に合わせた作風が生まれています。

しかし、古典立華はいげばなの源流として、花形の基本構成である天地人三体の組合せに陰陽を配し、自然の山水美を表現した様式は現在も変わっていません。

上野区での立華の創始は、江戸時代後期に遡ります。安政六（一八五九）年の春、上野区徳正寺住職と笛吹弥次右衛門両氏が徒歩にて湖西街道より京都の池坊六角堂を訪れ、立華を学んだことに始まります。その後、徳正寺住職により上野華道奨励会が作られ、両氏が習得した花形を今に伝えています。

上野区では、毎年二月中旬に定例として「古典立華伝承展」を行っており、平成十六年度からは南条文化会館を会場に展示会を開催しています。いげばなの原点ではありますが、現代に息づいている古典立華は珍しく、老若男女を問わず全国から参観者があります。（上野華道奨励会長 代継一郎）



伝えたい

まちの遺産

伊藤氏庭園

南越前町瀬戸の伊藤家は
代々庄屋を務めてきた旧家
です。庭園は、伊藤家十代
の祖で医業を営んだ助左衛
門により、江戸時代中期（享
保年間）に流行した庭園図
本『築山庭造伝』を手本に
してつくられました。

当時は庭師的な専門家はまだ存在しなかったため、助左衛門の相当厳しい指導のもと創設されたと伝えられています。伊藤家には「大変苦勞をして作った庭であるから、子孫は大切に守っていくように」という言い伝えがあり、「築山池泉の小庭としてよく保存されたものである」として昭和7年、国の名勝にも指定されました。

庭園は、主屋の南側に作庭された広さ五百平方メートル程で、「座観式林泉庭園」です。見所は地割と配石にあり、山の斜面を利用した築山の中央に三尊石、左右に不動石と山腰石が同間隔で置かれ、築山後方には遠山石を添えています。三尊石を基点として、すぐ前の座禅石、手前の礼拝石を結んだ縦の線がこの庭の主軸であり、延長していくと母屋の座敷中央を通りまわります。この主軸をもとに左右対称的な構成で配置されています。

庭池を挟んで右側を客人の座（上座）、左側を主人の座（下座）とし、上座には作者が一番工夫を凝らした「虎の子隠し」と呼ばれる石組があります。これは、豹（豹石）が谷間に隠れた虎の子の隙を窺っている様子を表現しています。下座には瀧口が設けられ、二谷三方石、オ

シドリ石などの石組が築かれています。

庭池は、東西に細長く心字形に作られた心字池となっており、蓬萊島としての亀島に対し池右隅に鶴の岬、怒濤石に対して舟石、遊漁石が配置されています。

築山の南東部にあるイチイは樹齢数百年といわれ、この庭園の作庭年代よりも遙かに古い名木です。往時に比べ樹勢が衰えてはいるものの、借景をなすスギの巨木とともに奥ゆかしさを添えています。

住宅庭園ではありますが、『築山庭造伝』の庭園図本に忠実な構成で作庭されており、伝統的日本庭園が持つ精神性や宗教的要素を感じられる落ち着いた雰囲気のある庭園となっています。また、作庭当初の姿をよくとどめていることから、単に鑑賞の価値だけでなく、庭園資料としても貴重な庭園です。



伝えたい

まちの遺産

古代の駅家・淑羅駅を考 える

七世紀末頃、律令国家は地方支配のため都と地方を結ぶ交通網の一つとして北陸道を建設。当時は官吏や勅使が往来する官道として国家の支配下におかれ、三十里（約十六キロ）を基準に駅家が設置されていました。

平安中期の法令集『延喜式』によると越前国には八駅が設置され、松原駅、鹿蘇駅に続く三番目に「淑羅駅」の名がみえ、続いて阿味駅、丹生駅となっています。駅の所在地については諸説があり、日野川を古くは淑羅川と書き「シクラガワ」「シラキガワ」と読んだことから、淑羅駅は鹿蘇駅（南越前町南今庄付近）から丹生駅（越前市丹生郷町付近）までの日野川流域に比定されています。書を引けば、「淑」は「美しい」「じとやか」を表し、「羅」は「薄絹」「連なる」を表すなど、淑羅は美しく淑やかな景観が連なった地域を形容した地名と思われます。日野川流域で風光明媚なところといえば必然的に日野山があげられ、より良い形が眺められる



越前国の駅家推定地

範囲となると、越前市南端から湯尾あたりに限定され、さらに、日野川流域という立地から洪水に強い台地で、経済的に駅家を支える駅田が必要になります。これらのことから、淑羅駅を南越前町「大道」付近に想定し、次は西大道・東大道に残る大字・小字の中から検討していきます。

①駅家推定地では「大道」の地名が多くみられ、阿味駅（越前市五分市町）や近江国の納結駅（滋賀県高島市マキノ町）にも「東大道」「西大道」の字名が残る。

②西大道の三字「御所ヶ谷」は、親王の御座所があったと推定。

③駅家にふさわしい小字として、西大道では五字「上（神）谷」、十字「大谷」、七字「八字」「下油田・上油田」、東大道では四字「射田」、十字「城兵領」、十二番「矢部」、十九字「茶ノ木原」が残る。

以上の地名や地理的条件から、西大道の台地「上谷」「大谷」を駅家と比定したいと思います。この付近は古代、日像菩薩様が日蓮宗布教の際、日野山のあまりの美しさに驚嘆、越前富士と申されたとも言われています。また、『淑羅河の岸辺』を書かれた柴田知明先生は、日野山を「群山を従えて美しくそそり立つ稜線の肩に朝日の輝き上るを仰いで一日の幸いを祈らずにはいられた」と記されています。古代の人々もこの台地からの美しい眺望を駅家に求めたのではないのでしょうか。

（南越前町文化財保護委員 加藤義弘）